

「人間の苦痛」の鑑賞と展示

— 教育学的考察の試み —

乙 須 翼

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

Viewing the Exhibition of “Human Suffering”: Possibility of the Pedagogical Approach

Tsubasa OTOSU

(Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

This study focuses on the conduct and phenomenon of viewing the exhibition about “human suffering”, such as suffering in war, tragedy, discrimination and disaster. In this paper, these are examined from pedagogical viewpoint. According to the study of dark tourism and war photography, materials about “human suffering” communicate various messages, which are not confined to educational implication, to museum visitors or the people who watch them in the mass media. But this problem related to the exhibition of “human suffering” should be recognized as a difficult challenge to peace education and moral education at school or museum, using this type of material. This paper examines this problem and tries to present the possibility to surmount them.

Key words

human suffering, exhibition, museum, pedagogical approach, peace education

要 旨

本稿は、戦争や惨劇、差別や災害など、「人間の苦痛」に関連した場所や資料を保存、展示し、それらを鑑賞する行為、またその現象を、教育学的課題として検討しようとするものである。ダークツーリズム研究や戦争写真論などで指摘されるように、メディアを通じて語られる「人間の苦痛」や、博物館で展示される「人間の苦痛」は、教育的要素を持つと共に様々なメッセージを見る側に伝える。しかし、そこで指摘されている問題は、学校や博物館での平和教育や道徳教育において、「人間の苦痛」に関連する資料が多く用いられる教育現場の問題でもある。本稿は、「人間の苦痛」を語る際に孕む問題点を検討しながら、その問題を乗り越える可能性についても提示した。

キーワード

人間の苦痛、展示、博物館、教育学的アプローチ、平和教育

1. 研究の背景

本研究が対象とするのは、戦争や惨劇、差別や災害など、「人間の苦痛」に関連した場所や資料を保存し、それらを展示、鑑賞する行為やその現象である。身近なものを例に挙げれば、

テレビや映画、新聞や写真等のメディアや、博物館などでの「人間の苦痛」の描写や展示の問題がある。また最近の話題で言えば、アメリカ同時多発テロのメモリアル（追悼施設）の完成や、今後課題となるであろう東日本大震災の記

憶の継承といったことが関連事象として挙げられる。

これらの行為や現象については、哲学や歴史学、政治学といった分野から、写真論や映像論、文学批評といった分野まで、様々なアプローチが可能な領域であり、これまでも研究がなされてきた。特に、2001年のアメリカ同時多発テロ以後は、アメリカ社会における戦争報道やイスラム表象のあり方を批判的に論じた著作や、哀悼や記憶のあり方を論じる著作が日本語でもいくつか翻訳されている（バトラー [2007]、ソントゲ [2003]、スターケン [2004]）。

本研究はこれらの行為や現象を、教育学と観光学の学際的共同研究として考察しようとするものである。本稿は特に教育学の立場からそのアプローチの可能性を探ろうとする。本論でも触れるように、観光学分野においては、世界遺産における「負の遺産」の認定や、ダークツーリズムと呼ばれる観光行動、そして観光の対象となる博物館等での「人間の苦痛」の展示といった問題が考察の対象となる。教育学分野においては、「人間の苦痛」の展示や鑑賞という問題を本稿のような観点で検討したものは管見の限り見当たらないが、修学旅行や遠足、また歴史教育や平和教育、道徳教育などで行われている戦争や差別、いのちを題材にした教育や、メディアリテラシーの問題などが関連してくると思われる。

以上のような観光学と教育学の重なりを想定しつつ、本稿は学際的共同研究の出発点として、「人間の苦痛」に関連した資料を展示、鑑賞する行為を考察する中で、その教育学的課題と今後の研究の展望について論じていく。具体的には、世界遺産における「負の遺産」の認定やダークツーリズムを語る際に言及される教育的効果や教育的要素の問題を取り上げ、そこで浮き彫りになった教育学的課題をまずは指摘する。その上で、「人間の苦痛」を語ること、そして見せることが孕む問題を考察し、教育の現場で「人間の苦痛」を取り扱うことの難しさと危う

さ、そしてそれを越える可能性について考えていきたい。

2. 観光学からの示唆

(1) 「負の遺産」の教育的効果

「人間の苦痛」に関連する資料を展示、鑑賞する行為やその現象を教育学的に検討する意義やその可能性はどこに見いだされるのか。また観光学との共同研究を試みる理由とは何か。まずはこの点について、観光に関連する分野の研究に触れながら、いくつか教育学への示唆という形で論じていきたい。

「人間の苦痛」に関連する場所や資料を保存する動きとして、UNESCO による世界遺産の認定がある。世界遺産の中には、ゴレ島（1978年認定）やアウシュビッツ（1979年認定）、原爆ドーム（1996年認定）、ロベン島（1999年認定）など、人種差別や奴隷制、ホロコーストや戦争に関連の深い遺産が含まれている。2010年には、ビキニ環礁核実験場とオーストラリア囚人遺跡群が認定され、特に核実験に関わるビキニ環礁核実験場が認定されたことで、日本でも大きな関心が寄せられている。

これらの遺産は、「人類史上の重要な出来事を伝える遺産のうち、今後こうしたことがあってはならないという戒めの教訓としての意味を持つ遺産」として、日本では一般的に「負の遺産」と呼ばれている（稲葉 [2011: 15]）。しかし、実際の世界遺産の認定においては「負の遺産」という評価基準やカテゴリーはなく、これらの遺産の多くは、「顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接又は実質的関連がある」という評価基準Ⅵの適用、また他の評価基準との併用による認定がなされている。戦争や差別のように、加害者と被害者が明確なこれらの遺産は、歴史認識などをめぐって政治的論争へと発展する危険性を有している。それ故に、その遺産が物語る「悲惨さ」といった加害者を想起させるような評価ではなく、あ

くまでも遺産と関連している出来事の普遍的価値を評価するという慎重な対応が認定の現場ではなされているのである(岡田 [2011: 19-21])。

このように、実際の世界遺産認定では特段の意味を持たないものの、我々は「負の遺産」という言葉で、冒頭に挙げたような遺産を一つのカテゴリーとして認識している。この点について稲葉は、『負の遺産』という用語もその定義も正式には存在しないのであるが、しかし、こうした側面から世界遺産を考えることは誰もが教育的効果があると考えるのであろう(稲葉 [2011: 15])と述べている。ここで稲葉が述べるように、我々はこれらの遺産を、過去の出来事、特に人間の負の側面を物語る出来事を後世に記憶として継承し、戦争や差別を考えていくための重要な教育素材として位置づけている。これまで歴史学が「記憶」というキーワードで明らかにしてきたように、英雄の死や戦争、その他先人の苦難の歴史を記念、哀悼したモニュメントやメモリアルは、国家的記憶もしくは民族的記憶を創出する場として大きな機能を果たしてきた(若尾・和田 [2010])。それ故に、被害者側と加害者側はその遺産の評価や保存の意義をめぐって、言い換えれば、国際的な形で承認される記憶のあり方をめぐって攻防を繰り返してきた。

だがここで改めて考えたいのは、「負の遺産」を語る際に前提としている「戒めの教訓としての意味」や「教育的効果」についてである。日本には原爆ドームという「負の遺産」があり、戦争の恐ろしさや悲惨さ、残酷さを後世に伝える場所として、遠足や修学旅行、その他外国からのスタディツアーなど、多くの人々がこの地を訪れている。また世界遺産に認定されていなくとも、日本には戦争遺構が他にもあり、それらにも同じような「教育的効果」が期待されている。特に近年では、「戦争経験者の語りから学ぶことが次第に難しくなっている。子ども達の身近な『モノ』から学ぶ工夫はこれまで以上に意味をもってくる」(竹内 [2011: 111])と

言われるように、戦後65年を過ぎ、以前にも増して、戦争の恐ろしさや悲惨さ、残酷さを「モノ」を通じていかに伝えるかが重要な課題となっている。

しかしその一方で、平和教育の分野においては、「日本の平和教育がこだわり続けてきた反戦の平和教育が、戦争の悲惨さを教えることに意を注いできたにもかかわらず、戦争を克服し紛争を非暴力的に解決する展望と確信を育てることに成功していなかった」(竹内 [2011: 78-79])と、戦争の悲惨さを強調してきた平和教育のあり方に懐疑的な声が強くなってきているともされる。戦後の平和教育を総括した竹内によれば、この懐疑的な見方は、自由主義史観などを主張する歴史修正主義者の動きや、日本社会における暴力に平和教育は対抗軸を示せなかったとする評価と結びついているとされるが(竹内 [2011: 78])、いずれにせよ、平和教育の分野においては、戦争の惨劇を物語る「モノ」を通じた教育が重要性を増す一方で、戦争の悲惨さや残酷さを教えることが果たして平和構築につながるのか、という根本的な問いが突きつけられている。

ここでは平和教育における戦争の取り扱いを例として、「人間の苦痛」に関わる資料を提示して行われる教育への懐疑を簡単に指摘したが、この問題は「負の遺産」という言葉で想起される、戦争以外の事象に関しても同様である。したがって、「負の遺産」が持つとされる「戒めの教訓」としての「教育的効果」は、決して自明なものではない。次節ではダークツーリズムという観光行動から、この問題を引き続き検討していく。

(2) ダークツーリズムの教育的要素

今述べた「負の遺産」を含め、「人間の苦痛」に関連する場所や資料を鑑賞する行為として、近年観光学で注目されているのがダークツーリズムである。2005年から研究サイトを開設するイギリスのセントラル・ランカシャー大学ダーク

ツーリズム・フォーラムによれば、ダークツーリズムは、大虐殺、奴隷制、刑務所、共同墓地、戦場のツーリズムに分類される (The Institute for Dark Tourism Research [2011])。またダークツーリズムを「学ぶ観光」の一つと捉えるフंकは、先行研究をレビューした上で、戦争に関連する場所、強制収容所、核兵器、原子力に関連する場所、大規模環境汚染の現場、災害の場所、刑務所、殺人事件の現場など、とダークツーリズムの対象を分類している (フंक [2008: 167-168])。その他、貧困や悲嘆、自殺行為に関連する場所を含める場合もあり、ダークツーリズムで訪れる場所や、そこで起こった出来事は多岐にわたっている。

ここでダークツーリズムを取り上げるのは、本稿が対象とする「人間の苦痛」を概観する意味もあるが、それ以上に、この新しい観光行動に含まれるとされる教育的要素の問題がある。ダークツーリズム研究の先駆とされる Lennon and Foley は、この新しい観光行動の特徴と実態について、次のようにまとめている。ダークツーリズムは基本的に20世紀初頭までの技術革新の進展や人間尊重、平等といったモダンな価値や物語への不安や疑念を表わしたポストモダンの現象であり、その出来事や場所に関する情報、つまり映像や写真を世界中に発信する情報技術が存在していることが特徴として挙げられる。そして、それらの場所には商業的・商品的要素と教育的要素が混合している (Lennon and Foley [2000: 11])。このようにダークツーリズムの特徴と実態はまとめられるが、ここでも「負の遺産」と同様、教育的要素が挙げられている。

この教育的要素に関連して、ダークツーリズム研究の中では、既にいくつかの問題が指摘されている。まず、ダークツーリズムが必ずしも受け入れ側が期待するような動機ではなく、好奇心や同情、ホラーといった動機や、メディアで扱われた残虐行為の場を直接確認したい、確認して自分達の幸せな生活を実感したいといっ

た気持ちや動機となっていることが指摘されている。また訪問者を受け入れる側が、残虐な出来事やその歴史を、訪問者に対してできるだけ教育的に、体験的に伝えようと手を加えることで、その出来事や場所の真正性が失われていくといったことも課題として挙げられている。さらに、観光の対象として哀悼と記念の場が商業化されていくことへの抵抗や、その出来事の解釈をめぐる政治的、民族的、宗教的対立なども実際に起こっているとされる (フंक [2008: 168-171])。

ここでダークツーリズムに関して指摘された問題は、「人間の苦痛」に関連する場所や資料を保存し、展示を通して誰かに鑑賞させたり、鑑賞したりする行為が孕んでいる問題を浮き彫りにさせる。特に、「人間の苦痛」を見ることが、見せる側の意図がどうであれ、好奇心や優越感、同情や怖いもの見たさといった感情を喚起する可能性を有しているという指摘や、見せること、つまり教育的効果を意識した展示をすればするほど、本来その場所や資料が持っている意味とは異なるメッセージが伝わる可能性が大きくなるという指摘は重要である。これらはまさに、日々教師が教育的意図を持って教材を提示しながら行なっている教育の問題として、教育学が引き受けなければならないものである。

ダークツーリズムの対象となるような差別や戦争、環境問題や開発問題といったテーマは、道徳の時間や総合的な学習の時間などにおいて、いのちや人権の尊重、平和や国際理解の大切さを学ばせる場面で特に取り上げられることが多いものである。さらにこれらのテーマに関わる教育は、先の平和教育の課題にもあったように、その出来事の悲惨さや残酷さ、苦しみや悲しみを、できるだけ子どもの心情に訴えかけるような形で語り、見せ、そこから教訓を汲み取らせていくという教育方法が比較的多く用いられる。もちろん全てのメッセージを生徒達が異なる形で受け取る訳ではない。しかし、近年道徳教育の現場では、道徳教育の「強化」が叫ばれる一

方で、学校におけるポストモダンの現象として、「道徳を教えようとする教師と、それにはうわべのおつきあいしかしない生徒たちという」、道徳教育の「空洞化」が進行しているともされる（船橋 [2009 : 68-69]）。したがって、教育学としても、「人間の苦痛」を伝える「モノ」のメッセージの強さと影響力の大きさを認めつつも、改めてそこに孕まれている問題に自覚的になり、それらを利用した教育の効果やその教育的要素を吟味する必要がある。

ここまで観光学分野で用いられる教育的効果や教育的要素という言葉に着目し、「人間の苦痛」に関連した場所や資料を見る行為、見せる行為が孕む問題を、教育学的課題として受け止める重要性を指摘してきた。次章からは、「人間の苦痛」を取り扱うことの難しさを読み解きながら、その困難を越える可能性について考えていく。

3. 「人間の苦痛」を扱うことの困難とそれを越える試み

(1) 「人間の苦痛」を語ることの不均衡

本稿ではここまで「人間の苦痛」という言葉を定義せずに用いてきたが、実は「人間の苦痛」を語ること自体、多くの困難を抱えている。その困難を全て指摘することは筆者の力量を越えるが、それを承知しつつ、ここからはいくつかの研究を手がかりにその課題を読み解いていきたい。

まず、「人間の苦痛」をどのように捉えるかという問題がある。差別による苦難や苦悩、悲しみなど、身体的痛みを伴わない苦しみも含めて、本稿では「苦痛」という表現を用いているが、身体的痛みについても必ずしも医療的に全て説明されるものではない。安楽死や SM、拷問などを挙げるまでもなく、痛みの感覚や、他人の痛みに対する反応や感受性は、至極、歴史性や文化性、政治性を帯びている（モリス [1998]）。

そして、苦痛をもたらす要因も決して一つで

はない。クライマンらは、様々な人間の苦しみを扱った最近の論文集を「社会的な苦しみ（Social Suffering : 日本語版タイトルは『他者の苦しみへの責任』）」とし、そのタイトルの意味を次のように説明する。

社会的な苦しみは、政治的・経済的・制度的な力が人々に加えられることによって、また、それらの力が人々の社会的問題の取り組み方に影響を及ぼすことによって、生み出される。社会的な苦しみをもたらす問題は、健康、福祉、法律、道徳、宗教などさまざまな分野にわたっている。それらは、既成のカテゴリーの境界をとりどりのぞく（クライマン他 [2011 : i]）。

クライマンらは、人間の苦しみは人間に関わる様々な社会的問題が密接に絡み合っていることに注意を促し、「社会的な苦しみ」という包括的な概念によって、様々な苦しみをそこに含ませている。先進国も含め、世界各国で貧困に窮している人々が抱える苦しみも、同じ貧しさによる苦しみでも、それぞれ何によって実際もたらされているかを想像すれば、クライマンらが指摘することの重要性がより理解できるであろう。

クライマンらが用いる「社会的な苦しみ」という包括的な概念は、苦しみを生み出す要因を一つに還元し、一面的に語ってしまうことで、複層的に絡み合う社会の問題を単純化して伝えてしまう、そういった危険性を回避しているとも言える。誰かに向けて「人間の苦痛」を語り、見せ、それによって教育しようとする行為を検討の俎上に載せようとする本稿にとって、「人間の苦痛」はまずこのようなものとして捉えられなければならない。

次に、誰の苦痛を「人間の苦痛」としてみなすのかという問題がある。この問題についてジェンダー研究で知られるバトラーは、同時多発テロ後のアメリカ社会を批判的に検証した著書の中で、次のように自問する。

最近のグローバルな暴力に照らして私に取りついて離れない問いがある。誰が人間としてみなされているのか？誰の生が〈生〉とみなされているのか？そして究極的には、何が生をして悲しまれるに値するものとなるのか？（強調原文）（バトラー [2007：48]）

バトラーはここで、必ずしも全ての人間が「生をして悲しまれるに値するもの」としてみなされていない状況を問う。もう少し具体的に書かれている部分を引用しよう。

ある種の悲しみが国家を挙げて承認され増幅される一方で、他の喪失は考えられることも悲しまれることもないのはなぜなのだろうか？ナショナルな鬱病状態がある種の否認をはらんだ喪として機能し、その原因として、アメリカ合州国が殺してきた名前やイメージや物語の公的な場における表象の抹殺がある。他方でアメリカ合州国自身が失ったものは、公的な哀悼をとおして聖なるものとされ、それが国民構築の一環をなす。人命の喪失に悲しむべきものと、それに値しないものがあるのだ。どのような人間が哀悼されるべきで、どんな人間なら悲しみの対象になってはならないのか。その違いを決めるのはだれが人間の規範に入るのかという排除の力学であって、そうした観念が作り出され維持されることで、このような差異による人命の振り分けがなされているのだ。いったい生きるに値する生と悲しみに値する死は、どのようにして決まるのだろうか？（バトラー [2007：8-9]）

バトラーは、悲しむべき価値のある苦痛がある一方で、そこに存在していることさえも抹殺されている人間がいることをここで指摘する。そして、「いったい生きるに値する生と悲しみに値する死は、どのようにして決まるのだろうか？」と、国家と一体となってアメリカメディアが誰かの死や悲しみを語る際、そこから意図的に排除されている人々がいることを告発し、彼らの苦痛へと人々の目を向けさせる¹⁾。

誰かの苦痛を語る時、そこには必ず語られていない誰かの苦痛があり、語られない理由もそ

こにはある。誰の苦痛が取り上げられ、誰の苦痛が取り上げられていないのか、その苦痛を引き起こしたとされる悲劇は誰によって代表的に語られるのか、バトラーはこれらの問いに敏感になるよう求めている。そして、「人間の苦痛」が語られる際に働く力の不均衡の正体を見極めること、この重要性を我々に教えるのである。

本節では、「人間の苦痛」を語る際に含み込まれる困難、言い換えればそこに働く政治性や力の問題を読み解いてきた。そしてそれらに対抗する手段として、その苦痛を生み出す複層的な社会の問題に目を向けること、そこで語られている「生」と、語られずともそこにあるはずの「生」を見抜き、その「生」の振り分けに働いている力の不均衡を見極めること、このことの重要性を導き出した。次節では戦争写真の研究を手がかりに、引き続き「人間の苦痛」を語ることの困難を考えていくことにする。

(2) 「人間の苦痛」を見せる側に求められる リテラシー

前節では、「人間の苦痛」を語ることに含まれる政治性を指摘したが、たとえ語る側がその政治性を諒解した上で誰かの苦痛を語ったとしても、そこにはまだ問題が残る。ここからは「人間の苦痛」が語られる際に生じるずれの問題について論じていく。

戦争写真を中心に論じたソングは、『他者の苦痛へのまなざし (Regarding the Pain of Others)』と題した最近の著作の中で、「人間の苦痛」を見せることの難しさについて次のように論じている。映像や写真が映し出す「他者の苦痛へのまなざし」は、必ずそこにその瞬間を切り取った人物の視点、そしてそれを報道、展示した人物の視点を含み込む。ここで言う視点とは、メッセージや演出、虚偽や誇張、隠蔽や傍観の態度、欺瞞などであり、写真を見る者は、その視点とは必ずしも一致しない形でその写真を受容し、その写真によってその出来事を記憶する。さらに、戦争の現場を伝える残酷な映像

や写真は、人々に大きな衝撃をもたらし、反戦運動などの社会的行動を生み出すこともあるが、繰り返し見せられることで我々の感覚を慣れさせ、報復の感情や、そこに映し出されている他者を「モノ」として所有するような感覚、性的興味をも生み出す可能性を有している（ソントグ [2003]）。ソントグはこのように、写真が含む多様な視点や、戦争写真が見る側に与えるインパクトや意味の複雑性、見せる側の思惑と見る側の反応のずれを指摘する。

それでもなおソントグは極限状態の苦痛にある人間をとらえた戦争写真の可能性を信じるが、そんなソントグにおいても、その写真の可能性や効果に最も否定的なのが、遠く離れた場所や遠い過去に起こった残虐行為の写真である。ソントグは、2000年にニューヨークで開かれた、1890年代から1930年代にアメリカで起こった黒人に対する残酷なリンチの写真展を例にとりながら、そこでの人びとの反応を次のようにまとめる。

このような写真を展示する意味は何だろうか。怒りをかきたてるため？「嫌な」気持ちにさせる、つまりぞっとさせ悲しませるため？哀悼させるため？ここにある恐怖がもはや懲罰のおよばぬ遠い過去のものであることを考えれば、これらの写真を見るのが本当に必要なのだろうか。このような映像をみることで、われわれはそのぶん善良になるのだろうか。それらの写真は実際にわれわれに何かを教えるのだろうか。それはただわれわれがすでに知っていること（あるいは知りたいと思うこと）を単に確証するだけではないだろうか（ソントグ [2003：90-91]）。

人々から寄せられたとされる上記の反応は、遠い過去にあった「人間の苦痛」を見せられた側がその展示に対して持つ疑念を見事に言い表している。展示された写真から読み取ることが期待されていること、つまりそこに込められた思惑や教育的効果を見抜きながらも、人々は展示された写真に対して懐疑的な眼差しを向け、不

快感や怒りさえそこには伴っている。しかし、このような写真展に対する人々の反応を、教師が提示する「人間の苦痛」に関連した資料に対して生徒が見せる反応と読み換えてみると、この問題は教育の場面においてより深刻、かつ見過ごせないものとなる²⁾。

また上記引用に続く部分で、ソントグは遠い過去の写真を見せることの意味とその効果を疑いながら、さらに核心に迫る。

問題は、われわれが誰を責めようと望んでいるのか、ということである。もっと正確には、われわれが責める権利をもっていると信じている対象は誰なのか。広島と長崎の子どもたちは、アメリカの小さな町で虐殺され木に吊るされた若いアフリカ系アメリカ人男性（と二、三人の女性）と同様に何の罪もなかった。（中略）再び問わねばならない。われわれは誰を責めたいのか。癒すことのできない過去の残虐行為のなかのどれを、再訪しなければならぬとわれわれは考えているのか（ソントグ [2003：91-92]）。

ソントグによれば、奴隷制度の悪を映した残虐な写真を見ることは、現在のアメリカでは、ヨーロッパ系アメリカ人の「義務」として次第に捉えられつつあるという。しかしその一方で、日本への原爆投下に代表されるようなアメリカの戦争は、いまだ見なければならぬものとしては捉えられていない。このような状況をソントグはここで指摘している。そして、「その爆弾のなしたことを示す証拠写真とともに、公平な問題提起をおこなうような博物館を設立することは、現在では以前にも増して、非常に非愛国的行動だとみなされるだろう」（ソントグ [2003：93]）と述べ、スミソニアン博物館におけるエノラゲイの展示をめぐる人々の反応を想起させるのである。「人間の苦痛」が見せられる時、見る側のその出来事に対する地理的、時間的、そして呵責や共感、義務感といった心情的な距離によっても、そこに見いだされる意味や反応は大きく異なってくる。このことに目を向ける

必要性もソングの議論からは読み取らねばならない。

戦争写真を中心に論じられたソングの議論は、戦争の悲惨さを教えることを中心としてきた日本の平和教育が、今抱えているとされる「乖離」とも関連している。竹内は、現在の平和教育に生じている四つの「乖離」を指摘し、その一つとして「過去の戦争と今日の戦争の乖離」を挙げている。その乖離は、「戦争イメージのズレ」、「戦争構造のズレ」、「戦争方法のズレ」として説明されるが、その中でも「戦争イメージのズレ」について竹内は次のように述べる。テレビゲームのように映し出される戦争、偽造するメディアを通して伝えられる戦争、言葉で巧みに事実を覆い隠された戦争からは、今の若者達は戦争の「リアル」をイメージできない。そして、その「リアル」に欠ける戦争しか知らないにも関わらず、その戦争を「リアル」だと感じる子ども達にとって、60年以上も前に起こった日本の過去の戦争は、それ以上に「リアル」さにかける。したがって、このズレを踏まえた上での平和教育が必要となる、このように竹内は指摘する（竹内 [2011: 7-9]）³⁾。

戦争を扱うメディアへのリテラシーの重要性を指摘しながら、戦争に対する「リアル」のズレを説明し、そのズレをいかに意識した教育をするかが肝要であるとする竹内の指摘は、ソングが戦争写真を見せることの困難に関わって論じた議論とも重なる重要な指摘である。そしてまた、平和教育や歴史教育の場面においては、過去に起きた「人間の苦痛」を通して何かを教えようとする時、「癒すことのできない過去の残虐行為のなかのどれを、再訪しなければならないとわれわれは考えているのか」というソングの問いかけは、常に反芻しなければならない。

ここまで「人間の苦痛」を語ること、また見せることに関わる様々な困難を読み解いてきた。この困難を教育という場面において受け止め、それを越えることを目指せば、そこで必要とさ

れているのは、「人間の苦痛」を扱うためのリテラシーとすることができる。特に、「人間の苦痛」を語る側、言い換えれば「人間の苦痛」を見せる事で教育しようとする教師の側には、メディアリテラシーに限定されない、「人間の苦痛」の複層性や背後にある力の不均衡、その資料の真偽や本質、また見る側への影響や受容のずれの可能性、これらを読み解くリテラシーが求められるのである。

(3) 展示の政治性を越える試み—「フォーラムとしてのミュージアム」—

前節まで論じてきた「人間の苦痛」に関わる難題を全て抱えているのが、写真や映像、「モノ」やパネルなどを通して「人間の苦痛」を展示する博物館という場である。ここからは博物館展示の新しい議論を参照しながら、この難題を越える可能性について考えていくことにする。

ここまで「語る」や「見せる」という言葉を用いながら、「人間の苦痛」を展示すること、そしてその展示を鑑賞することに孕まれる問題を検討してきたが、ここで改めて展示という行為の性質を確認しておきたい。『展示の政治学』という論文集の中で、川口は展示を、「ある意図の下にモノや事象を並べて不特定多数の人々に見せる行為」（川口編 [2009: 13]）と定義し、その性質を次のように説明する。

ある意図の下にモノや事象を並べて見せるというのは、別のいい方をすると、その営みを通して、展示する側の意図を視覚的に見る側に訴えようということであり、これは一言でいえば表象する、語るということにほかならない。もちろん、語るとは同時に騙ることもある。ただ展示の場合、視覚を通してである分、言葉による語りに比べるとメッセージの伝わり方はあいまいであり、受け手側の解釈が入り込む余地も大きい。すなわち誤解が生じがちだということである（強調原文）（川口編 [2009: 14]）。

展示という行為を博物館展示に限定せず、広く

定義する川口は、言葉ではなく視覚によってのみ見る者にメッセージを伝える展示は、その他の表象行為に比べ、そこに解釈が含まれる余地が大きい分、「誤解」が一層生じやすいと言う。教材という「モノ」を提示しつつ、言葉による語りも伴いながら行なわれる教育という行為を、展示とも共通する問題を孕む行為としてここまで論じてきたが、川口の説明によれば、展示は言葉によって語られることがない故に、その表象行為には最も慎重にならざるをえない⁹⁾。

博物館の展示が持つ政治性については、サイドの「オリエンタリズム」以後、特に異文化を表象する民族展示を中心に、日本でもこれまで議論がなされてきた(吉田 [1999]) (川口編 [2009])。近年では、歴史系博物館においても、過去にあった出来事を展示する歴史展示を、一定の歴史観を創出し、その歴史観やイメージをメッセージとして来場者に伝える、もしくは展示側の意図しない形で伝えてしまう場として自覚的に捉え、その展示方法や展示内容を検証する動きが見られる(国立歴史民俗博物館編 [2003])。

このような博物館展示の政治性の自覚に関わって、民族系、歴史系に関わらず、その展示の政治性を越える試みとして近年注目されているのが、「フォーラムとしてのミュージアム」という概念である。この考え方を日本で紹介し、その有効性を提言している吉田は、これまでの『『テンプルとしてのミュージアム』』とは、すでに評価の定まった宝物を人々が拜みにくる神殿のような場所。一方の『フォーラムとしてのミュージアム』』とは、未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所」とその概念を説明する(国立歴史民俗博物館編 [2003 : 198])。今後の博物館が目指すべき方向として吉田が提案する「フォーラムとしてのミュージアム」を補足すれば、展示をする専門家と展示を見る一般の訪問者、そして展示をするマジョリティと展示されるマイノリティ、そして展示物や展示内容と人とのコミュニケーション、これらが常

に行われ、見直しが行われる博物館ということができる(吉田 [1999 : 210-235])。博物館を「フォーラム」として位置付け直すことで、展示が持つ「騙り」や「誤解」をできるだけ克服しようという試みである。

この「フォーラムとしてのミュージアム」という新しい概念は、本稿で論じてきた「人間の苦痛」を展示することに伴う困難を越えるものとしてもいくつかの可能性を有している。以下ではアメリカの博物館の事例を取り上げながら、その可能性について考えていきたい。またその中で、教育現場で「人間の苦痛」を扱う際のヒントとも言えるものを導き出してみたい。

まず、「フォーラムとしてのミュージアム」の可能性を論じる前に、博物館における「人間の苦痛」の展示が持つ特徴について少し整理しておく。前節で検討したソクタグが、「人々は自分たちの記憶を再訪し、呼び戻せることを求める。今では犠牲を出した多くの民族が記念博物館を、年代順に網羅的に構成し、写真等で例証を付した自分たちの苦しみの物語を納める殿堂を求めている」(ソクタグ [2003 : 85]) と述べるように、「人間の苦痛」を展示する場所として最も一般的なのが民族系歴史博物館である。メモリアル(追悼施設)の機能を有することも多いこの種の博物館は、博物館の中でも最も「テンプル(神殿)」としての機能を持ちやすい博物館の一つである。そこでは民族が辿ってきた「苦しみの物語」が強烈なメッセージとして人々に展示され、訪問者もそれら予め評価や価値の定まったメッセージ性の強い展示を拜みにくる、そういった空間が作り出される。

さらにこの種の博物館においては、その展示手法にも特徴が見いだされる。アメリカのマイノリティ集団の博物館を検討した馬は、近年建設が続くこの種の博物館が、展示を通して苦難の歴史や悲惨さを強調するだけでなく、従来の白人系博物館に比べ、「展示収集機能」よりも「教育機能」を重視し、アウトリーチや体験型展示など、自民族の子ども達への文化伝達や教

育機能を充実させていることを指摘している(馬 [2009: 4-5])。自分達の民族の「苦しみの物語」を訪問者、特に自民族の子ども達に伝達することを重視する中で、展示をより教育的に、体験的にする工夫がなされているのである。

民族系歴史博物館における教育的、体験的展示の重視は、はじめの方で検討したダークツーリズムの広がりによる「真正性」の喪失とも関わる問題であるが、展示のメッセージを静的に、そして視覚にのみ訴える形で展示する手法に比べれば、この種の展示は「フォーラムとしてのミュージアム」の方向に向かっているとも理解できる。しかし、むしろ展示手法を教育的にすることで、見る側に一つのメッセージをより固定的に、強調した形で伝えるという可能性もそこにはある。そして、この点は「人間の苦痛」を語る際の困難を考えれば、危うい面も多分に有している。したがって、展示手法だけでなく、展示内容が「フォーラム」として人々に開かれ、常に問い直されていなければ、「人間の苦痛」を扱うことに関わる問題を克服する道とはならない。

(4) 「フォーラム」としての展示スペース—事例紹介—

では「人間の苦痛」を開かれた形で展示する「フォーラム」としての博物館とはどのようなものか。博物館展示を個別に取り上げ、その展示を吟味、評価する作業は紙幅の関係上、別の機会に行いたいだが、ここでは筆者が最近訪れたペンシルヴェニア州フィラデルフィアの博物館の二つの事例を簡単に紹介したい。

まず一つ目は、フィラデルフィアの中心部に1976年に建設されたユダヤ系歴史博物館(National Museum of American Jewish History)の展示である。この博物館のメイン展示では、アメリカのユダヤ系移民の歴史が1階から4階までのフロアに写真やモノ、映像によって年代順に綴られる形で展示され、順路の厳格な指定やボランティア・スタッフによる解説

など、ユダヤ系移民の辿った苦難の歴史が一つの強いメッセージとして訪問者に提示されている。特に20世紀前半のナチに関わる時代や、アメリカの移民排斥運動の高まりの中でユダヤ系青年に対して行われたリンチを扱う展示においては、映像や音、照明が最大限活用され、ドラマティックな演出がなされている。また同じく移民抑制が行われていた時代の展示では、入国審査のシミュレーションがタッチパネルで体験できるようになっており、当時のユダヤ系移民が受けた差別的な質問に回答する形で、当時の入国審査を体験できるようになっている。そして聖堂とも近接するこの博物館では、サマーキャンプや聖堂でのイベントなど、文化伝達や教育機能も多く有している。

このように、全体の印象としてはソングや馬が指摘するような民族系歴史博物館ではあるが、その展示の中において注目すべきが、「現代的問題を考える場(contemporary issue forum)」と題された空間である。特に展示物のないこの空間では、いくつかの質問が黒い壁に照明で映し出され、訪問者にその質問が投げかけられる形となっている。筆者が訪問した際(2011年8月25日訪問)には、「イスラエルはユダヤであることと民主主義国家であることを両立しうるか」という質問や、「アメリカの政治において宗教は何らかの役割を果たすべきか」といった質問が、「あなたはどう思いますか」という形で投げかけられていた。訪問者はこれに対して「はい」「いいえ」「うーん」という三種類の付箋型コメント用紙の中から好きな用紙を選び、その場でコメントを残せるようになっている。そして訪問者が書いたそのコメントは、質問と同じように照明で壁に映し出され、博物館のホームページ上でも確認できるようになっている(National Museum of American Jewish History [2011])。過去の「苦しみの物語」だけでなく、これからのユダヤ系移民が歩いていくべき道を、まさに「現代的問題」として展示側と訪問者が対話し、議論し、考えを共

有できるしかけが作られていた。

同じように、訪問者に問いかけ、議論する場が設けられていたのが、ペンシルヴェニア大学附属考古学博物館（Penn Museum）で行われていた「本物の麻薬常用者達（rigteous dopefiend）」という小さな写真展示である³⁾。アメリカ都市部のホームレスの人達、特に麻薬中毒者をテーマとするこの展示では、ホームレスの人達の日々の暮らしを、恋愛観や親との関係、仕事、過去と未来、国に対する思いなど様々な観点から映し出す写真とパネルが展示されている。この写真パネルの展示だけであれば特段取り上げるようなものでもないが、この細長い展示スペースの中央には、受話器がおかれ、その受話器を取ると、ホームレスの人達の暮らしを彼ら自身の言葉で聞くことができるようになっていた（図1）。もちろんこの電話はオンラインではないが、貧困と麻薬中毒という「人間の苦痛」の中にいるものとして一方的に表象され、展示されるだけで物言わない存在ではなく、展示される側も声を出し、主張し、訪問者に語りかける、そういった工夫が施されていた。また麻薬常用者達を援助する団体の紹介リーフレットや、寄付箱も設置され、展示を鑑賞した訪問者が次の



図1 展示スペース中央に設置された受話器（筆者撮影）

アクションを起こすためのヒントも添えられていた。

さらにこの写真展示の端のスペースにも、アメリカの貧困問題について議論できるスペースが設けられ、黒板とチョークが準備されていた。筆者が訪れた際（2011年8月24日訪問）には、「国民皆保険はホームレスの人々の生活を改善することができるか」という問いが書かれていた。訪問者はこの質問にその場で答えることが可能になっており、上記の質問に対しては、「いいえ、ホームレスの人々がますます怠けてしまうから」といった回答が書かれていた（図2）。この問いを書いたのが主催者か訪問者かは不明であるが、展示を作る側と展示される側、そして展示を見る側が議論をし、展示を作りあげていく工夫が小さな写真展においてもなされていた。

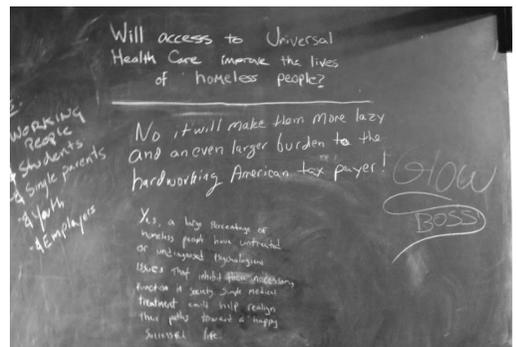


図2 展示スペースの端に設置されたメッセージボード（筆者撮影）

このように、「フォーラム」としての博物館を目指す試みは、「人間の苦痛」の展示においても実践されている。ただし、この最後の例を見てもわかるように、このような訪問者参加型、もしくは議論型とも言える展示は、一人の訪問者のメッセージが展示全体のメッセージとなって伝わるという危うさも有している。しかし、「人間の苦痛」を一方的で固定化したメッセージとして展示するのではなく、その問題をできるだけ多面的に考え、そして双方向的になるよ

うな形で提示し、訪問者も展示づくりに加わりながら、さらに訪問者が次のアクションを起こすためのヒントも用意される、こういった「フォーラムとしてのミュージアム」の可能性を感じさせる展示であった。

4. むすびにかえて—教育学的展望—

本稿は、「人間の苦痛」に関わる事象を観光学と教育学との学際的共同研究として考察するため、まずはその教育的アプローチの可能性を探ってきた。具体的には、「人間の苦痛」の鑑賞と展示が抱える困難を指摘しながら、それを教育的課題として受け止め、考える必要性と、その困難を越える可能性について論じてきた。最後に簡単に触れた博物館における新しい動きは、博物館展示に、問いかけること、論争をしかけること、対話をする、固定化したメッセージを崩すこと、コミュニケーションを持ち込むこと、こういった試みとして捉えられる。そしてこの試みは、本論中で指摘した「人間の苦痛」を扱う際に求められるリテラシーと組み合わせることで、教育の場面においても、「人間の苦痛」を教材として扱う際の困難を越えるものとして受け取れる。「モノ」が伝える、また「モノ」によって伝えられる「人間の苦痛」のメッセージの内容や解釈をそのまま鵜呑みにするのではなく、その背景にある複層的な社会の問題や不均衡な力の存在についても考えを巡らしながら、教師と生徒が共にそのメッセージを吟味し、議論し、そして次の行動を考えていく、こういった工夫が「人間の苦痛」を扱う教育の場面では求められる。

このような試みはまさに今、博物館や学校現場において少しずつ実践され始めている。平和教育においては、先に竹内が指摘した平和教育の「乖離」の二つめとして指摘されている「遠くの暴力（戦争・飢餓・抑圧など）と身近な暴力の乖離」を埋める平和教育実践が始められており、その中でも「フォーラムとしてのミュージアム」の考え方に重なるような実践が紹介さ

れている（竹内 [2011]）⁶⁾。また近年教育機能を重視する傾向にある博物館においても、真珠湾攻撃をテーマとした教育ワークショップでの日米教師の対話が紹介されるなど、博物館展示と歴史教育のあり方を共に模索していく動きも見られる（矢口 [2009]）。本稿で指摘した「人間の苦痛」を展示、鑑賞することが孕む問題が、博物館や教育現場でどのような形で受け止められ、いかにその克服が目指されているのか、実例を通じた検討は今後の課題としたい。

付 記

本研究は国際観光学科共同研究費（「ダークツーリズムに関する観光学と教育学からのアプローチ研究」（細田亜津子・小坂智子・乙須翼））の研究成果の一部である。

注

- 1) ここでは、メディアで決して報道されない、アフガニスタンやイラク、パレスチナの人々、テロへの関与を理由に無期限拘留されている囚人達、そしてニューヨークの世界貿易センター近くで亡くなった同性愛者やホームレスの人々が具体的に言及されている。また哀悼の対象として繰り返し報道されるエリートビジネスマンや消防士達の死、そして隷属状態から解放された象徴として表象されるアフガニスタンの女性達にもバトラーは言及している（バトラー [2007]）。
- 2) ここでの人々の反応は、船橋が「空洞化」が起こっているとする道徳教育での生徒の反応と重なってならない。展示会での鑑賞が自発的な行為であることを考えれば、むしろ授業で強制的に資料を鑑賞させられる教育の場面の方がより深刻である。
- 3) 竹内はこの部分で「15年戦争の学習で用いられる空襲や沖縄戦の写真・映像、戦争体験の語りなどの教材はいずれも『リアル』である。（中略）平和教育において、偽造や覆い隠しのない『リアル』な戦争を子ども達は学習してきたのである」（竹内 [2011: 9]）とこの後述べるが、ソングの議論を追ってきた本稿にとって、この教材の「リアル」を無批判に受け入れることは躊躇される。平和教育が永らく用いてきた教材をここで評価するつもりはないが、少なくとも「リアル」を常に疑う姿勢は必要である。

- 4) ダークツーリズム研究で指摘されている、「モノ」を教育的に語ることで真正性が失われていくという指摘や、展示の教育機能を重視する近年の動向を見れば、言葉による語りの有無で展示と教育の相違を強調するよりも、本稿では類似点の方にむしろ着目したい。
- 5) 写真展の詳細は、同名の著書 (Bourgois and Schonberg [2009]) を参照されたい。
- 6) 竹内が戦後の平和教育を総括し、今後の展望を提示する形で編んだ『平和教育を問い直す一次世代への批判的継承』の中には、竹内が「狭義の平和教育」と呼ぶ戦争をテーマとした平和教育から、人権教育や多文化理解教育、開発教育などを含む「広義の平和教育」まで、様々な教科で取組まれる平和教育や、博物館との連携など、新しい実践が多く紹介されている (竹内 [2011])。

引用・参考文献

- 稲葉信子 (2011) 『「負の世界遺産」という言葉から考えること』『世界遺産年報』16, 15-18頁。
- 岡田保良 (2011) 『「関連性」—世界遺産登録にあたっての評価基準 (vi) をめぐって』『世界遺産年報』16, 19-21頁。
- 川口幸也編 (2009) 『展示の政治学』水声社。
- クライマン他 (2011) 『他者の苦しみへの責任—ソーシャル・サファリングを知る』(坂川雅子訳 池澤夏樹解説) みすず書房。
- 国立歴史民俗博物館 (2003) 『歴史展示とは何か—歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来』(株)アム・プロモーション。
- スターケン, M. (2004) 『アメリカという記憶—ベトナム戦争, エイズ, 記念碑的表象』(岩崎稔他訳) 未来社。
- ソントグ, S. (2003) 『他者の苦痛へのまなざし』(北條文緒訳) みすず書房。
- 竹内久顕編 (2011) 『平和教育を問い直す一次世代への批判的継承』法律文化社。
- バトラー, J. (2007) 『生のあやうさ—哀悼と暴力の政治学』(本橋哲也訳) 以文社。
- 船橋一男 (2009) 「道德教育の「強化」と「空洞化」のなかで」『教育』764, 63-70頁。
- フंक, C. (2008) 『「学ぶ観光」と地域における知識創造』『地理科学』16(3), 160-173頁。
- 馬曉華 (2009) 「観光・エスニシティ・記憶の文化ポリティクス—アメリカ合衆国におけるマイノリティ集団の博物館を中心に—」『歴史研究』47, 1-22頁。
- モリス, D. B. (1998) 『痛みの文化史』(渡邊勉・鈴木牧彦訳) 紀伊国屋書店。
- 矢口祐人 (2009) 「ミュージアムと教育—真珠湾教育ワークショップの事例から—」川口幸也編『展示の政治学』水声社, 153-166頁。
- 吉田憲司 (1999) 『文化の「発見」—現代人類学の射程』岩波書店。
- 若尾祐司・和田光弘編著 (2010) 『歴史の場—史跡・記念碑・記憶—』ミネルヴァ書房。
- Bourgois, Philippe and Schonberg, Jef (2009) *Righteous dopefiend*, University of California Press, California and London
- Lennon, John and Foley, Malcom (2000) *Dark Tourism*. Continuum, London and New York
- The Institute for Dark Tourism Research (University of Central Lancashire) (2011) <<http://www.dark-tourism.org.uk/>> [November 17, 2011]
- National Museum of American Jewish History (2011) <<http://www.nmajh.org/>> [November 17, 2011]